

[第14回学術集会シンポジウム]

## 外来看護に求められる家族看護を考える ～小児外来看護領域における家族看護～

東邦大学医療センター大森病院

吉野 尚一

事例は、幼児期前期の男児で、母親と二人で来院した。診断名は、流行感染症である。家族構成は、両親と幼児期後期の男児の二人兄弟であり核家族であった。祖父母は遠方に住んでおり、育児支援者は父のみであった。

母親は問診時、「この子死んでしまうということはありませんか?」と涙ながらに訴え、わが子の死を想起する緊張状態にあった。看護師は、母親に対し、「言葉の意味を認める関わり」を行い、母の想いをもとに「医師と看護スタッフへの情報伝達と共有」を図った。患児は点滴加療中、不機嫌ではあるが活気を取り戻し、自己抜針をするまでに至った。その行為に対し、母親は児を叱責し、叩くなどの姿があった。母親は、看護師との会話の中で「この子は育てにくく、イライラすることが多い」という発言もあった。このことから母親の看病による疲労度は強く、余裕のなさが感じられた。また母親は、兄の面倒をみてあげられない罪悪感を抱いていた。父親の仕事は多忙を極めており、患児の看病を代行できる状況になかった。そのため看病を行う母親の精神的・肉体的疲労による児への負の影響という悪循環を断ち切るため、入院加療および看病代行者の検討という選択肢を母親へ提示した。母親へ児の傍を離れ休息をとり、気分転換を図り、その上で児の看病を父へ依頼するよう説明した。看護師は、家族バランスの変調に対し、「家族による意思決定を促進する働きかけ」、「チームとして協力と連携」を図った。母親が、児のベッドサイドを離れている間は、看護師と看護補助者により児の見守りを代行した。母親は父親と相談し、父が夜間だけ看病を手伝うという形で協力を得ることができ、入院することとなった。これらのことから母親は、患児から離れ、罪悪感を抱いていた兄と関わりを持つことができ、母親と患児との悪循環から脱した。

このように看護師は、看護スタッフ・医師・看護補助者のリソースと共に、この母親に対し、「母親の言葉の意味を認める関わり」「情報の共有化と家族への関わりを検討」「家族による意思決定を促進する働きかけ」「家族の問題を、看護師だけでなく、医師、看護補助員を含めたチームとして協力と連携」を行った。

子どもを持つ親は、多かれ少なかれわが子の健康と将来を案じている。近年、養育環境は、少子化・核家族化により、少ない子どもを大事に育てたいという親の意識が高まっている。さらに女性の社会進出・子育て伝承の減少・近隣社会との親密性の希薄さ・子育ての困難さなどにより、育児不安や育児能力低下などの変化をもたらしている。家族の生活スタイルの変化により、育児時間も減少し、子どもの急病に対して緊張状態におかれる家族の増加が考えられる。当院の小児医療センター外来のように、1日120名程度の患者が訪れ多忙を極める中で、家族看護や外来看護を十分に行うことは厳しい状態である。しかし外来看護は、診療補助だけではなく、看護として求められる内容や役割は大きく、まだまだ看護の可能性を秘めている。外来という環境は、家族員の急病により訪れる最初の部門である。子どもの急病は、家族の準備性を低下させ、家族は緊張飽和状態にある。そして外来看護者は、その家族と接する最初の医療者であると同時に家族看護の必要性を見出す最初の部門である。小児外来において、家族看護を実践するためには、「家族の思いを肯定的に受けとめること」「家族に対し簡易であってもコミュニケーションをとること」「看護介入の必要性を医療者の中で共通認識すること」「家族間で問題調整するよう働きかけること」「チームの連携と資源の活用をすること」が必要ではないかと考える。本シンポジウムが、今後の小児外来家族看護への一助と発展となればと切に願う。